

井上靖

傾ける海
群舞

群舞

傾ける海

井上靖

新潮社版

群舞・傾ける海

〈井上靖小説全集17〉



昭和49年2月20日発行
昭和52年2月25日2刷

定価 950円

© Yasushi Inoue, 1974,
Printed in Japan.

著者 井上 靖

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七一 電
話・業務部(〇三)二六六一
五一、編集部(〇三)二六
六一五四一一 郵便番号・一
六二 振替・東京四一八〇八

印刷所 二光印刷株式会社
製本所 株式会社大進堂

乱丁・落丁本は、御面倒で
すが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担に
てお取替えます。

目次

群舞

五

傾ける海

三四

自作
解題

四九

装
画
加
山
又
造

井上靖小説全集 第17卷

群 舞

仕舞い込み、すぐ窓際
いる大きいビルデイン
海でも見えるかと思っ

寝台に横たわっているうちに、田之村は次第に睡氣を催して来た。体を横たえさえすればどこでもすぐ睡氣を感じることは、こんどの旅へ出てからの特殊な現象である。インドからネパール、パキスタンにかけて旅行した半年の間、よくまあこんな眠る事ができると思う程、どこでもよく眠った。眠るために日本を離れたようなものである。

仕事はろくにしなかった。田之村はここ何年か米国の雑誌社へ日本から写真を送る、いわば日本駐在の写真部員のような役を持って居り、こんどもその腕を買われて、特派員のような恰好でインド入りをしたのであった。インド、パキスタンの国境に取材した写真を数枚送ればそれでこんどの責任は一応果せるといふ、非常にらくな旅行ではあった。経済的にも一応何の心配も要らなかった。

ただ、仕事をすれば、それは彼が旅行費用を出して貰っている米国の雑誌社とは切り離した個人の仕事になる筈であった。戦後、インド、ネパール、パキスタン方面へ足を踏み入れた各国のカメラマンは、未開の土地を紹介してそれぞれ纏まった仕事をしていた。仕事をしないで手ぶらで帰る怠け者はなかった。しかし、いま半年を過ぎて日本へ帰ろうとしている田之村は、仕事と言えるような仕事は何一つしていなかった。仕事をする代りに、自分でも驚くほどよく眠ったのである。

その仕事をしていないということが、帰路について香港の土を踏んだ時、田之村の心にもさすがに多少鬱陶しくのしかかって来ていた。だから東京へ帰るのが一日遅れるとなれば、それはそれで心のどこかに却って吻とする気持ちもないではなかった。

田之村は三時まで眠った。昼食を摂らないで眠っていたので、起きた途端に空腹を感じた。田之村は先ず洗顔をすると、街へ出て何か腹へ詰めることにして、取りあえず部屋に珈琲を運んで貰った。珈琲を飲みながら、田之村は自分が仮睡の間に夢を見たことを思い出した。初めも終りも忘れてしまったが、とにかく方良りつ子と二人で小学校の校庭のようなところで、短い会話を交している夢である。

——暫くでした。

——あら、貴方、どなたでしたかしら。

——田之村克也です。

——田之村？ 田之村さんて、わたし存じませんわ。人違いじゃございません？

——冗談じゃありませんよ。もう何回もお会いしてますし、お宅で御飯までごちそうになっているじゃないですか。思い出して下さいよ。

——でも。やっぱり、わたし存じあげませんわ。

——よく顔を見て下さい。この顔に記憶はありませんか。

——ええ、でも、やっぱり、憶えがありませんけど。

ここで方良りつ子は悲しげな顔をした。悲しいというより、愁わしげな顔である。田之村はいつもこうした方良りつ子の顔を見ると、いきなり魂を鷲掴みにされたような氣持になる。夢の中でも、田之村は急に上半身の血がすうっと頭部のでっぺんから抜け出して行くような氣がして、当然のことであるがそこで貧血の症状を起すのを感じた。田之村は早く方良りつ子の世にも美しい顔をレンズに収めてしまおうと思った。そうでもないとい自分倒れてしまふだろう。しかし、どういものか肝心のカメラのシャッターが見つからない。

夢はそれからお続いた筈であるが、そこでぶつとりとフィルムは切れてしまつていた。田之村は珈琲を啜りながら、まだこんな夢を見るようでは、自分の方良りつ子に対する執着は断ち切れていないと思つた。半年間異境の地をうろついていて、一体自分は何をしていたのかと、自分自身を叱りたい氣持であつた。

それにしても夢の正直さに田之村は驚いた。ずいぶんともんな夢ではあるが、どこかに眞実性が感じられないでもない。幾ら自分が名乗つても、向うが思い出してもくれない、そんな距離が、自分と方良りつ子との関係の中には置かれてゐるようである。田之村のこの半年間の旅行の、そ

もその動機は、彼が方良りつ子への執着を断ち切るに最もよい機会であると思つたからであつた。そのように苦勞して断ち切ろうとしてゐる田之村の執着心も、相手の方良りつ子にとっては少しも知らぬことなのである。田之村は方良りつ子に恋情を打明けたこともなければ、そうした氣振りさえ示したこともなかつた。また、友人にもそうした自分の氣持を打明けたようなこともなかつたから、所詮相手の方良りつ子が知りよう筈もないことであつた。

それにしても、相変らず何と魅力のある顔をした女だろう。あれが他人の細君でなかつたら、いかなる障害を乗り越えてでも自分は彼女の心を得るために努力を払うだろう。生命さえ惜しみはしないところである。——田之村は今まで何百回考へたか知れぬ同じことを、またいま自分が頭の中でこねくり廻してゐることに氣付くと、急に顔を歪めて軽く舌打ちをした。まだ日本へ帰るのは早かつたかも知れぬ。田之村は夢の欠片を向うへ押しやるように、珈琲の最後の雫を啜り終ると、椅子をうしろに引いて立ち上がった。そして上着を抱え、街のレストランへ行くために部屋を出た。

ホテルを一步出ると、待ち構えていたように彼の周りをいっせいに靴磨きの少年たちが取り巻いた。靴を磨きたいというのかと思つたら、煙草を買ってくれということらし

かった。

「だめ、だめ」

田之村は舗道を大股に歩き出した。一番汚ないシャツを着ている子供だけが、いつまでもうしろからついて来た。顔を見ると、なかなかいい眼付きをしている。

「幾らだ？」

田之村は言いながら、ズボンへ手を突っ込んだ。煙草を受け取って紙幣を出すと、少年は紙幣を掴んだまま釣銭は出さず、指を口に当ててびいっと鳴らした。忽ち五、六人の子供が手に煙草をかざして駆け寄って来た。田之村は仕方なく、少年たちから何個かの煙草を受け取った。まだ釣銭はある筈だった。しかし、少年たちは田之村を御しやすいと思つたのか、釣銭は出さず、そのうちにさっと背を向けると走り出した。

「こら！」

田之村は呶鳴ったが、追いかけて追いつくような相手ではなかった。またたくまに少年たちの姿は小さくなって、通りから消えてしまった。俺にはこうしたところがある。お人好しのために、いつもしてやられるのだ。

田之村はレストランを見つけると、そこへはいって、ピフテキを食べ、そこを出ると、暫く街中を歩いた。大きい貴金属店の前で、飾窓に飾ってある宝石を覗いた。大粒の

ヒスイの玉が田之村の眼を惹きつけた。田之村は長いことにそれに吸い寄せられていた。頭の中で東京へ着くまでに必要な金を計算し、持金からそれを差引いた額を数えてみた。その数字は、いま飾窓の中にある碧の玉の値段の三分の一にもみたなかった。田之村は碧の玉をはめた白く細い指を眼に描いていた。しかし、自分の財布ではとても購^{かひ}えぬことを知ると、田之村は飾窓を離れた。

五、六間行つてから、田之村はまた引返して来て、こんどはつかつかとその店の中へ入って行つた。

「余は一番上等で、一番小さいヒスイの玉を見ることを欲する」

田之村はかたことの英語で、中国人の店員に言つた。店員はネクタイピンにでもすると思つたのか、ケースの中から小さいヒスイの玉を幾つか取り出して来た。田之村は残金の全額を、それに相当するヒスイの小さい粒と交換した。

ヒスイの粒を収めた小箱を持って店を出てから、田之村はもしかしたら早まったかも知れないと思つた。方良りつ子の夫が高名な貿易商であることを思い出したからである。彼女が持っている宝石類の中には幾つかのヒスイがあるに違いない。しかも、それらは大きな上質の物に違いない。それらの中に並べられたら、この小粒のヒスイはさぞ肩身を狭くすることだろう。

——俺にはとかくこうしたところがある。

田之村はホテルへ向かつて歩き出した。心が重くなつた代りに、ひどく身が軽くなつたような気がした。余分な金を全部離してしまつたためであろう。空を仰ぐと、汚れた灰色の空の一角に青い空が見え出し始めていた。

翌日は快晴だった。一晚香港に泊められた旅客たちは、九時にホテルの前でバスに乗せられて空港へ向かった。空港では二十分程待たされた。田之村は空港の白い土と、その向うに鋭い青さを見せている何となく人工的な匂いのする海とに眼を注いでいた。

定刻通り、九時五十五分に機は離陸した。田之村はこれでいよいよ今夜は銀座ですが食べられると思つた。友人の誰一人にも帰国の日時を報せてないので、まかり間違つても出迎えのあろう筈はない。その点気は楽であつた。羽田へ着いたらすぐタクシーを駆って銀座へ向かう。うまいまぐろのすしをつまんで、そのあとは酒場を二軒ほど廻る。どこでも突然顔を見せたら、女たちはさぞ驚くことだろう。田之村は幾人かの女給の顔を眼に浮かべた。

機が離陸して二十分ほどしてから、田之村が旅先での最後の仮睡をむさぼるために、椅子を倒して舂の姿勢を楽にした時、突然眼の前に白い一枚の名刺が突き出されて来た。

「わたしはこういう者ですが、田之村さんでいらっしゃいますね」

田之村が見上げると、通路に四十五、六の年配の赤ら顔をした肥った人物が立っていた。

「そうです。僕、田之村ですが」

田之村は言うと、突き出されている名刺を受け取つて、それに視線を落した。「Rフィルム株式会社、宣伝部長、大矢亀太」。Rフィルムというのは日本でも有数のフィルム会社である。

「こんどは大変な旅行で、お疲れだったでしょう」

相手は言つた。半身を折るようにして話しかけているのだが、田之村が椅子を傾斜させているので、相手の顔は恰も田之村の顔の上に覆いかぶさるかのような妙な恰好になっている。田之村が返事をする前に、相手は、

「暫くお邪魔してよろしいでしょうか」

と言つた。田之村は椅子の背を起し、改めて相手に顔を向けると、

「どうぞ」

と言つて、空いている隣の席を眼で示した。田之村は、外国人が殆どの席を占めている機内で、相手が特別に日本人同士の誼みを感じて話し込みに来たのではないかと思つた。大矢亀太なる人物はポケットから煙草を取り出し、田

之村の方へそれをすすめ、自分も一本とると、こんどはライターを出して火を点けて寄越した。

田之村は黙っていた。大矢はおもむろに煙草の煙を口から出すと、少し言いくそような表情をしてから、

「こんどのご旅行でお使いになったフィルムは何でしたでしょうか」

と訊いた。

「いろいろ持つて行きましたが、勿論、お宅の会社のものもありますよ。Rフィルムもずいぶん持つて行きました」

田之村は言った。

「そうですか。それは有難うございました。問題の雪男をお撮りになったのは、どのフィルムでしょうか」

「雪男!? そんなものは撮りませんよ」

田之村は相手が余り突飛なことを言い出したので、笑いながら答えた。

「ヒマラヤでお撮りになったという雪男のフィルムですよ。もし、うちの会社のフィルムでしたら、それを護って戴けないでしょうか」

「おっしゃることが、どうも僕にはよく判りませんな」

田之村は言った。特に不愛想に言ったわけではなかったが、相手は何を感じたのか、急に恐縮したような表情をして口調を和らげると、

「いや、これは私の申し方が失礼だったかもしれません。気を悪くなさらないで下さい。雪男のフィルムだけというのは全くこちらの勝手な申し分です、できれば、こんど

のご旅行中の全部のフィルムを戴けたら、護って戴きたいんです。引取らせて戴くについては、決してご迷惑をかけるようなことはいたしません。ご満足の行く程度のお礼は勿論さし上げることになっていますし、発表方法はうちで出している雑誌へ逐次掲載させて戴いても結構です。あるいは一時に発表なさる方をご希望になりますならば、特集号を出しましょう。一冊にまとめて出版いたします場合は、お礼の方は勿論また改めて御相談に乘ります。いづれにしても、お仕事の全部を買わせて戴きたいと思ひます。それから問題の雪男のフィルムですが、これは勿論、ありていに申し上げれば、私の方ではこれが一番戴きたいわけがあります。これはこれで他のお仕事の分とは別に御相談させて戴きましよう。恐らくは希望になるだけの額をお払いでできると思ひます」

相手はべらべらとまくし立てた。田之村は相手のよくめくれる厚い唇を見守っていたが、

「ちょっと待って下さい」

と言って、相手の言葉を遮った。

「雪男、雪男とおっしゃるが、一体、それは何のことで

す」

すると、相手は田之村の方に向き直って、

「いや、これは恐れ入ります」

と、急に卑屈になってお世辞笑いをした。

「勿論、田之村さんの方には、田之村さんの方でお考えがあることであります。新聞社からの口もかかりましようし、雑誌社からの口もかかりましよう。テレビ会社も放っておきませんでしよう。そのことはよく存じています。それであればこそ、私は本社の命令で香港からこの飛行機に乗ったのであります。——その点、こちらの気持をぜひ掬んで戴いて、何分とも特別の御配慮を戴きたいと思ひます」

幾ら配慮してくれと言つても、田之村には相手の言うことが全く理解できなかった。

「とにかく、よく判るように話して戴きましよう。僕には貴方のおっしゃることがよく理解できません。貴方は何か僕のことをかん違いしておられるんではありませんか。僕は、カメラマンの田之村克也です」

田之村が言う、相手はまた卑屈な笑いで顔を歪めて、
「そうおっしゃらずにぜひ、真面目に取り上げて戴きたいんです」

「真面目にも、不真面目にも、僕は貴方の言うことは判ら

ん」

田之村は初めて、不機嫌さははっきりと顔に現わして言った。短気なことは生れつきである。すると相手は、こんどは少し悲しげな顔をして、

「そうおっしゃらずに、ぜひ。——お匿^{かく}しになつても、もう田之村さんがヒマラヤで雪男をお撮りになつたことは、津々浦々まで知れわたつております。大変な話題になつております。どの雑誌も雪男、雪男です」

と言つた。

「僕がヒマラヤで雪男を撮つた？ 冗談言つてはいけません！ なるほど僕はヒマラヤらしいところへは行つた。ヒマラヤへは行かん。らしいところだ。——麓^{ふもと}ですからね。

僕の行つたところからまだ、ヒマラヤと名のつくところへは一月も二月もかかる。あるいは三月も四月もかかるかも知れない。僕は小さい時から山というものは嫌いだ。大体高いところへ一歩一歩登るというようなことは苦手だ。一歩一歩低いところへ降りる方がらくでいい。そんな僕がヒマラヤなどへ登る筈はないではないですか。厭なことですよ。ごめんだな。別に用事もないのに、どうしてそんなところへ登らなければならぬ」

田之村克也はまくし立てた。この時に限らず田之村は少し腹を立てるとまくし立てる癖がある。反対に心がおだや

かな時は黙っている。

「困りますな」

相手は言った。そして、

「私の言い方がご不快だったらお詫びいたしますよ。では、いづれ、またあとで邪魔することにしませう」

Rフィルム株式会社宣伝部長の大矢亀太は、形勢を不利ととつたらしく、また出直すつもりか、そう言う、その場は引き上げて行つた。

雪男とはひどいことを言いやがる！ 自分自身が雪男にでもされたように、田之村克也は腹を立てていた。折角久しぶりで日本へ帰るというのに最後のコースがとんだ事で台なしにされてしまった氣持だった。

田之村は再び椅子を倒すと、体を背後にもたせて眼をつむつた。それにしても雪男を撮つたとは、どこでどう間違えられてしまったのか。しかし、田之村はそのことを長くは考えなかった。ばからしくて考える氣にならなかった。それに大体雪男というものがどんなものか見当がつかなかった。ヒマラヤの奥に雪男という、人間とも獣ともつかないものが棲息しているかも知れないという記事は、雑誌や新聞で読んだことがあるが、特別の関心も持たなかったもので、はっきりとは記憶していない。何でもひどく大きいもので、足跡が一尺も二尺もあるとか書かれてあつたと思う。

色は？ 雪男というのだから色は白いのだろう。顔は？ よく判らぬが、猿か人間みたいな容貌風姿を持つているのではないか。

田之村はそんなことを考えているうちに、いつか眠りに落ちた。眼が覚めると、沖繩の上空を機が翔んでいるというアナウンスが聞えている。窓から覗いてみると、真下に低い丘陵がいっぱい起伏している沖繩島が見えている。樹木で覆われている丘陵もあれば、樹木一本もない禿けた赤土の丘陵もある。それを取り巻く海はあざやかな紺青を呈していて、波でもたっているのか泡立っている感じた。

沖繩を過ぎると、昼食が遅はれて来た。それを食べ終ると、間もなく大矢亀太はまたやって来た。

「いかがでしょう」

「なにがいかがです？」

「どうか、もう、——真面目に考えて戴きたいんです。私も真剣です」

「私だって真面目ですよ。真面目に話してる。これだけ言つて判らんですか」

田之村は二度目に腹を立てた。

「失礼なことを言つてはいかん。僕は真面目だ。貴方に会つた最初の瞬間から真面目なんだ」

「ですがねえ」

大矢亀太はいやにゆっくりと言った。

「東京の大新聞一つ残らず、貴方が雪男の写真を撮ったことを報じているんです。一紙だけに出たというのなら、何か間違ひか知れませんが、どの新聞にも出たんです。これは信用しない方がどうかしてます。信用して当り前でしょう。新聞に出たくらいだから、週刊誌にも当然出てますよ」

それからふいに思いついたように大矢亀太はスチュアデスと呼んで、

「日本の週刊誌ある？」

と訊いた。

「ございます」

背の高いスチュアデスは去って行くと、すぐ一冊の週刊誌を持って戻って来た。あいにくこれ一冊しかないということだった。大矢はそれを受け取ると、

「これにはどうかな。——多分載っていると思うんです」
そんなことを言つて頁をめくっていたが、

「ある、ある。——これ、この通りあります」

大矢はある個所を開くと、開いたままそれを田之村の方へ差し出した。田之村克也は覗き込んだ。いきなり見出しが眼についた。「果して雪男は撮れたか」。田之村は雑誌を受け取ると、改めてその開かれている頁に眼を当てた。

「ほら、ここに貴方の写真が載っているでしょう」

言われてみると、確かに自分に違ひない男の写真が隅の方に小さくはめ込まれてある。そして動物学者の肩書を持つ男の談話が最初に載っている。

——日本のカメラマンが雪男の写真を撮ったというが、さあ、どんなものでしょう。それが本当なら、確かに世界的なニュースと言えましょう。私も是非見たい。

そんなことが書かれてある。

「ちょっと待つて下さい。一応この記事をゆっくり読ませて下さい。——その上でお話をうかがいましょう」

田之村は言った。こういう他はなかった。すると、大矢亀太は急に表情を変えて笑顔を作ると、

「いや、承知いたしました。どうぞゆっくりお読みになつて下さい。じゃ後刻また——」

言い棄てると、大矢はまた自分の席へ帰って行った。田之村は一人になると、世にも奇怪な記事を改めて初めから読み出した。

——カメラマン田之村克也氏がヒマラヤで雪男をカメラに収めたというニュースはいま世界中を沸かしている。まさに世紀の話題である。しかし、果して田之村克也氏は雪男をカメラに捉えたであらうか！

これだけがゴチック活字に組まれていて、あとは本文に

なっている。本文の方には、先刻の動物学者のほかに、動物園の園長、登山家、田之村もよく知っているカメラマン、医学者、それから長くインドに居たというM商事の元カルカッタ支店長、そういった六人の人物がそれぞれ雪男問題に勝手な意見を述べている。動物学者のみならず、他の者も言葉の強弱の差はあれ、すべて否定的のようである。

登山家。——ゆかいな話です。ともかくこうしたニュースはないよりあった方が面白い。雪男は二十世紀最大の人類の夢ですからね。今までにも雪男を見たとか、雪男を捉えたとかいった人物は、三十年に一度ぐらいの割合で出ています。その度にいっぱい喰わされるが、それでも結構世界中の人間は楽しんでます。しかし、雪男を撮ったという人間が日本から出たということには驚いた。これで日本もどうやら世界的になったとも言えましょうか。

読み終ると、田之村は軽い怒りを覚えた。まるで、これでは人をベテン師扱いではないか。

動物園の園長。——雪男の写真は是非見たいものです。私は実際に雪男というものがあるとすれば、やはりそれは類人猿の一種だと思う。猿と人間との間の動物で、足や手は大きくても体は案外人間と変らないのではないかと思う。どういう写真が撮れているか知らないが、余り期待してはいけない。それほど大きくもなければ奇妙でもない動物が

映っているに違いない。

カメラマン。——田之村君なら撮るでしょう。彼はいつも人をあっとさせるような仕事をする。そうした仕事が好きでもあり、得意でもある一種一風変わった型のカメラマンです。彼は恐らく実際に雪男を撮ったと思う。とんでもないものがフィルムに映っているに違いない。但し、それが本当の雪男であるかどうかは保証の限りではない。しかし、インチキな人物ではないから、彼は本当にそれを雪男だと信じているでしょう。人間はいかなることも信じる権利がある。

畜生め！ と田之村は思った。インチキな人間だと言わんばかりである。

医学者。——よく幻覚を見るといふ人はあるものです。沙漠などを旅行していると、突然城が見えたり、塔がうつったり、都会が見えて、そこを電車が走ったりしている。幻覚は概ね精神的にも肉体的にも疲れた人に起る現象です。元M商事カルカッタ支店長。——カルカッタに居たところ、やはり雪男騒ぎがありました。雪男がつかまったと街中大騒ぎでした。見たかって？ それは見ませんよ。噂だけで、ついにつかまえたという男はカルカッタへは現われませんでした。カルカッタばかりではなく、ネパールにも、世界のどこへも現われませんでした。もともと面白半分は大嘘つ